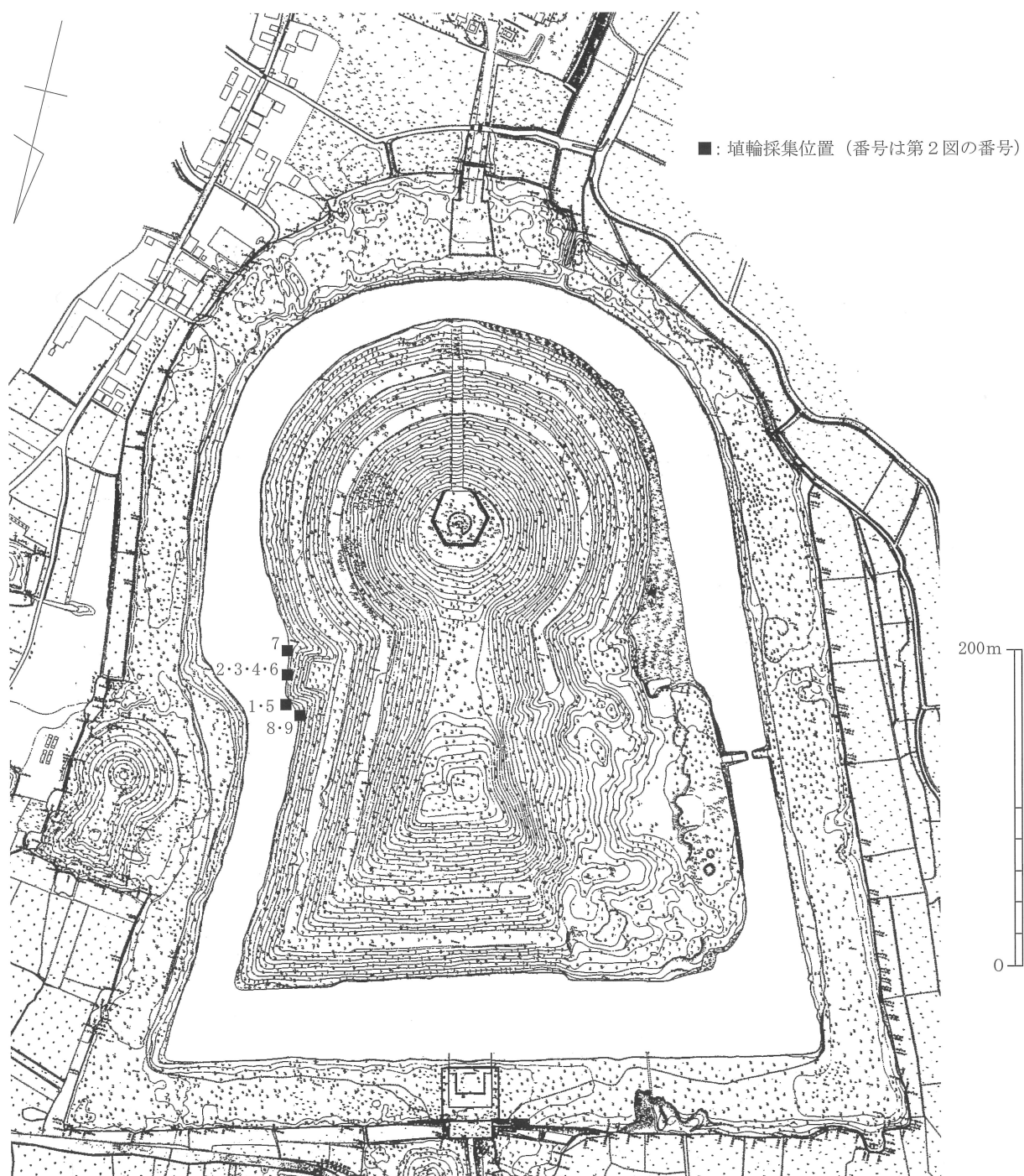


応神天皇 恵我藻伏岡陵の採集品について

はじめに

現在、陵墓課では、歴史・考古学関係 16 学協会からの要望に応じて年 1 回程度の陵墓への立入観察の機会を設定している。令和 5 年度は、同 4 年度に引き続き応神天皇陵で 2 回目を実施したところである。重点的な観察予定箇所は前年度と基本的には同じであるが、1 回目の観察を踏まえて新たに観察箇所で要望が出たところもあり、適宜対応した。



第 34 図 恵我藻伏岡陵における埴輪採集位置図 (1/4000)

本誌 75 号では、1 回目の立入観察の際に、東造出の裾部で幾つかの埴輪を採集したので、報告を行ったところであるが、2 回目においても、同じ東造出の裾部で新たに採集した埴輪片があるので、以下に報告したい。

1 採集箇所について

造出（第 34 図） 本誌 75 号でも説明をしているが、改めて記載しておきたい。造出は、くびれ部の東西両側に取りついている。東造出は、上面が第 1 段テラス面とは段差があり現状で約 1 m 低くなっている。周濠水面からの比高は、現状で約 7 m である。西造出は前方部側面の崩落による土砂に覆われているが、第 1 段テラス面との高低差は東側と同様である。また、東西の造出は同規模・同形態ではなく、陵墓地形図や世界遺産登録推進にかかる事業で行われた航空レーザ測量の成果などからも異なる構造であることがうかがえる。

今回報告する資料が採集されたのは東造出である。現在、造出上面には埴輪列などの存在を示すような目立った兆候は認められないが、裾部では転落したと考えられる埴輪片が認められる状況である。陵墓地形図を見る限りでは、造出の墳丘への接合部の屈曲は緩やかであるが、それは相当の堆積土があることによると観察され、特に後円部との接合部については、深い谷状地形が形成されていたのではないかと考えられる。

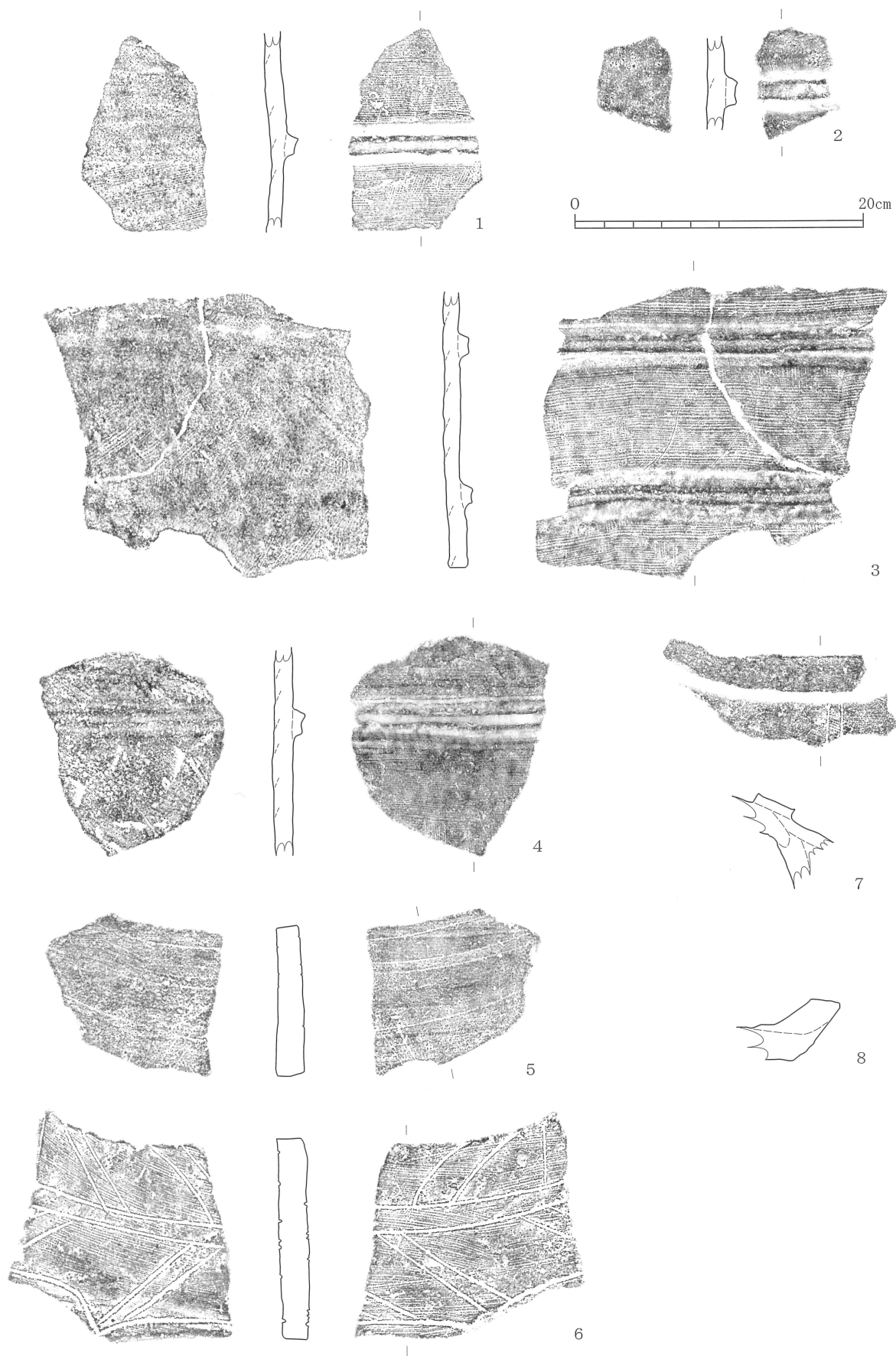
採集位置（第 34 図） 今回採集した埴輪片は、東造出の北東隅付近から東側の裾で確認されたものである。造出裾から約 1.5 m ～ 2 m 離れた場所である。造出上面から転落してきたと考えられる。採集箇所には転落してきたと考えられる葺石が堆積している状況が観察され、下にはさらに多くの埴輪片が転落していると考えられる点は、1 回目と変わらない。

2 採集品の所見

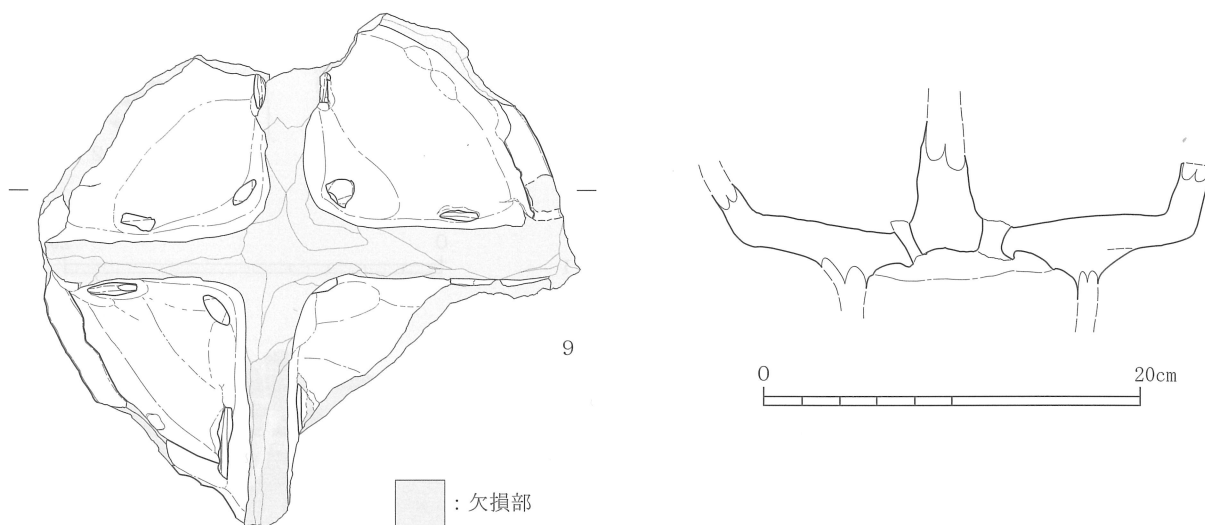
円筒埴輪片、蓋形埴輪片を採集している。円筒埴輪片 4 点、蓋形埴輪片 5 点である（第 35 図、図版 54）。

円筒埴輪 1 は、突帯を挟んで上下の範囲が残る胴部の破片で、突帯下方に円形透孔がある。外面は、2 次調整として突帯の上方下方ともヨコハケがみられ、下方で 1 次調整のタテハケが確認できる。ヨコハケの静止痕間隔は確認できるところで 3.5 cm である。内面は、突帯より上方はハケメがなく、横方向の指ナデ調整が施されており、下方はヨコハケである。色調は暗茶褐色を呈している。胎土には径 1 ～ 3 mm の砂粒を多く含んでいる。2 は、突帯を挟んで上下の範囲が残る破片である。内外面とも摩滅のため調整痕は不明瞭である。色調は明褐色を呈している。胎土には直径 1 ～ 3 mm の砂粒を多く含む。3 は、突帯が二条分残る比較的大型の胴部破片で、円形透孔を確認できる。外面は、各段とも 1 次調整タテハケの後 2 次調整ヨコハケがみられる。ヨコハケの静止痕間隔は確認できるところで約 8 cm である。内面は、タテハケの後右斜め上方にハケメを施す。色調は明褐色を呈している。胎土には、直径 1 ～ 3 mm の砂粒を多く含み、5 mm に及ぶ砂粒も少量認められる。4 は、突帯を挟んで上下の範囲が残る胴部の破片である。外面は、突帯の上下とも 2 次調整のヨコハケがみられる。下方では、一部に 1 次調整のタテハケも観察できる。摩滅がみとめられるため、ヨコハケの静止痕ははっきりしない。内面は、左斜め上方へのハケメを施す。突帯に対応する部分は指ナデ調整である。色調は暗茶褐色を呈している。胎土には、直径 1 ～ 3 mm の砂粒を多く含む。

蓋形埴輪 5 ～ 9 は蓋形埴輪の破片である。5 は、立飾りのうち飾り板部分である。ハケ調整の後、線刻を施している。片面の摩滅が進んでいる。色調は暗茶褐色を呈している。胎土は、直径 0.5 ～ 3 mm の砂粒を多く含んでいる。6 は、立飾りのうち飾り板部分である。焼成状態は良好で摩滅はみられない。ハケ調整の後に線刻を施している。中央の線刻から樹枝状に広がるような構図となる。外縁部が鱗飾り状に整えられているほか、色調は明褐色を呈している。胎土は、直径 2 ～ 3 mm の砂粒を多く含む。赤色顔料の塗布も認められる。7 は、笠部の一部である。突帯と肋木を表現した線刻が確認できる。外面は、笠部にヨコ～ナナメ方向のハケメがみられる。内面は、指頭押圧とヨコ方向の指ナデである。色調は明褐色で、胎土は直径 0.5 ～ 3 mm の砂粒を多く含む。8 は、立飾りのうち飾り板の受部細片である。内外面とも指ナデ調整である。色



第35図 恵我藻伏崗陵 採集埴輪実測図 (1) (1/4)



蓋形埴輪（9）の立飾り基部内面の状況

第36図 恵我藻伏岡陵 採集埴輪実測図（2）（1/4）

調は茶褐色を呈し、胎土は直径0.5～5mmの砂粒を含む。9は、立飾りのうち受部～飾り板にかけての破片である。笠部に差し込む筒部は欠いている。飾り板はハケメ調整、受部は指頭押圧と指ナデ調整である。色調は明褐色で、胎土は0.5～5mmの砂粒を含む。目立つ特徴としては、飾り板によって分かれる4つの区画には、それぞれ断面が凸レンズ形となるヘラ状工具による刺突孔が認められる。刺突孔の形状からヘラの先端はやや尖っていることがわかる。穴は長さ1.5cm前後、幅は0.7cm前後である。各区画には3つずつあり、配置は、飾り板の交差部分の根元に各1箇所、それぞれの飾り板の根元に各1箇所である。刺突孔は計画的に配置されている。また、飾り板交差部分の刺突孔はすべて貫通しているが、各飾り板の根元8箇所のうち明確に貫通しているのは1箇所だけで、他は貫通していない。穿孔の傾向に明確な違いが認められる。

各破片とも黒斑はみられず、1回目の機会に採集したものとおおむね共通した特徴をもっているといえよう。
(清喜裕二)



1 前方部第1段テラス面～東造出上面（南から）



2 くびれ部～東造出上面、斜面（南から）



1 埴輪 円筒胴部 外面 (左から 1・2)



2 埴輪 円筒胴部 外面 (3)



3 埴輪 円筒胴部 外面 (4)



4 蓋形埴輪 立飾り (5)



5 蓋形埴輪 立飾り (6)



6 蓋形埴輪 笠部 (7)



7 蓋形埴輪 立飾り基部 上面 (9)



8 蓋形埴輪 立飾り基部の穿孔 (9)